

偏食が激しいA君への支援

社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所めばえ学園

今井 明日香

(寄り添う 信頼関係 連携)

1. はじめに

A君はめばえ学園に通って3年目になる5歳児（自閉スペクトラム症）です。物事の変化などにとっても敏感で、やっていたことが突然変わったりすると戸惑い、拒否をしたり、元に戻そうと必死になる反面、とても集中し執着していたものに突然全く関心を示さなくなります。食事や着脱、排泄などの生理的なことには感覚の過敏さがあり、拒否的な様子を見せることもありました。食事については、入園時から食べられるものが少なく、白米だけでは全く食べられず、これまでふりかけやめんつゆ、ケチャップなどの調味料をかけたり、海苔で巻いたり、パンや麺類などは食べ方に波はあるものの、一定量は時間をかけ食べられようになりました。皆と一緒に給食の場所では食べられず、A君が遊ぶ場所で療育者に勧められ食べていました。しかし、昨年度の3月頃からそれまで食べていた調味料つきや海苔巻きのご飯、麺類なども全く食べなくなってしまいました。

2. 支援内容

私は食事についてはA君が給食の机に来ることや席に座ること、あるいはいろいろな物を摂取することだけを目的に関わるのではなく、まずは食を通し満たされていると感じられること、好きなものを気持ちよく食することが出来るようにと思い、様々な調味料類を用意し自分で味を調整できるような環境作りを心掛けました。例えば海苔巻きを食べにくい時も、海苔に米粒を1粒、3粒と量の加減や、海苔の硬さなどA君とも確認しながら、“無理に食べさせられる”と思わずに“食べてみようかな”と少しでも気持ちを動かしてくれるようにと関りました。食事以外の活動の中でも、一緒に楽しみ、また困ったり嫌なことがあった時に、気持ちに寄り添いなだめながら、A君が安心できるように“分かってもらった”と思えるような関りを日々心がけました。そしてA君が私に気持ちを向けてくれるようになると同時に、少しずつ食事の様子も変わっていきました。そのような経過ただけに、また食べなくなったということに、どうしたものかと思いました。



そこで、まず保護者と情報を共有したところ、お家で最近気に入っている『ゆかりふりかけおにぎり』の話を引きました。「A君が少しでも食べられるならやってみよう」と、すぐにゆかりふりかけの提供を開始しました。保護者から「ゆかりふりかけを多めに混ぜてラップで包んだ大きいもの」と聞き、同じように作りA君に見せると、はじめはお家で作るものが学園にもあると戸惑い、不思議そうな表情でいました。それでも気になる様子で匂いを確かめ、指で触れていました。「大丈夫、食べてみよう」の声かけに、ふっと指についた米粒を食べ、その後はどんどん食べ、おにぎりを食べきりました。「A君食べられたね」と嬉しそうに伝えると、A君も私の顔をじっと見ていました。保護者に報告すると一緒に喜んでくれました。その後のA君はどんどん変わり、おにぎりだけでなく、茶碗でも食べたり、積極的に給食の場を見に来るようになりました。そのうちに興味のなかったソースを使うようになり、魚や肉料理、納豆にもソースをかけ、食べられるものが増えました。保護者に伝えると「お家でもやってみます」と

言い、数日後、「納豆にソースをかけると食べました。毎日食べるくらいにブームになりました」と嬉しそうに話がありました。現在は、ゆかりふりかけご飯の海苔巻きが大好きになり、A君自ら、調味料のカゴまで療育者を連れていき、手を叩いて“作って”と伝える姿も見られます。そして机のお皿に用意をした海苔巻きを、時には椅子に座り食べています。のり巻きを作る療育者の様子をじっと期待して見て、そして自ら食べて笑っているA君の姿が見られ、本当に嬉しい気持ちでいっぱいです。

3. まとめ（考察・今後）

私は、一時食事を急に食べなくなっただけに、A君の中でどのような理由や気持ちの変化があったのかははっきりとは分かりません。しかしその時期も食事の関りで特に大事にしていたのは、日常のA君との関りと同じように、「今日のご飯嫌だね」や「食べなくてもいいよ」などA君に寄り添いながらA君の気持ちを肯定することでした。そしてA君の気持ちを認めた上で私の気持ちも、「A君が食べてくれたら嬉しい」、「これだったらどうかな」など伝えていきました。そしてA君にとっては、日頃の私との関りの中で感じることでできた安心感や好意が、食事の場面にも繋がり、“安心できる、わかってくれる先生が言っているから”と、私の声かけや関りにまた少しずつ気持ちを動かしてくれたのではないかと思います。そしてお家で好んで食べているものを聞き取るなど保護者との連携を取っていったことや、療育者間で話し合いA君が少しでも安心して食べられるものを提供しようとして決めていったことは私にとっても大きなことでした。私は、A君が“食べたい”、“食べよう”と嬉しそうに食事の場所に来る様子を見て、今後も様々な食事に関する特性や偏食を持つお子さんに出会う機会はあると思いますが、今回の事例だけでなく、様々な事例を振り返りながらも、お子さんたちにしっかりと向き合い、お子さんとの信頼できる関係をしっかりと積み重ねていくことが“おいしく楽しく食べる”ということにもまた繋がっていき、そして子どもたちの主体性、自発性を育てていくことにも繋がるのだと感じています。

oo

<助言者コメント>

森田 規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

.....

感染症禍にもかかわらず、小さな子どもに寄り添いながら工夫を重ねて支援されている学園の先生の静かな情熱を感じます。

3歳頃は、食べやすく刻んだ野菜や少ない種類でも一定量を食べてくれていたのに、これまで食べていた主食を食べてくれないということで、ご家族も学園の先生も本当に心配されたと思います。発表から、学園でA君が落ちついて食事に楽しく集中できるような環境を様々な工夫されていることがよくわかりました。

一方、主食を拒むA君の様子からは、目の前の食べ物の形や色を見て、触って、匂いを確かめて、食べようかな？ どうしようかな？と考えて、“何か違う気分だなあ”とパスしているような感じを受けました。成長と共に好みも育ってきて、食べ物をよく見分けて自分で決めているA君のペースに寄り添って、家庭と連携して食事の楽しさを大事にされたことが新しい成長につながったと思います。今井先生が、日頃から一貫して心がけている子どもに寄り添う声かけや態度を食事の支援でもきちんと保ち、根気強くかかわられたことはA君に安心感を与えたと思います。

食事支援は、子どもの成長のために必要な栄養や量を考えて、他の場面よりも支援が押し付けになりやすい傾向にあります。本事例では支援者がA君に食事の楽しさを感じて欲しいという願いを込めて、無理強いせずに工夫したプロセスが子どもの新しい成長に繋がったことを示していると思います。食事の広がりや、他の場面でも興味の深まりや行動の安定などに繋がると思います。A君が笑顔で『ゆかりごはん』を食べている様子を想像しながら、これからの成長に期待を募らせています。